

戦前期日本におけるコメニウス言説再考 7

相馬 伸一

[Abstract]

This thesis is a part of comprehensive survey of discourses of J. A. Comenius in prewar Japan. When national education system, one of the main agents of the formation of nation state was established in mid 19th-century Japan, Czech thinker in the 17th century, Comenius was introduced as a precursor of modern education. More detailed examination on the process is expected for the deeper understanding of the acceptance of Western education in Japan.

Through examining the books and magazines mainly concerning education published up to 1945, the author discovered more than 20 articles about Comenius, which have not been mentioned in the previous survey. In this series of theses, the author lists them up and reconsider the process in which the interpretation of Comenius changed and diversified. After mentioning the newly found articles in the period dealt with in this series of examination so far, this thesis deals with the articles and books appeared in the period from 1931 to 1934, and pays special attention to Yasutaro Takeyama, who involved in the beginnings of diplomatic relations between Czechoslovakia and Japan, and Sanpei Hyodo, educator who acted in Aichi Prefecture.

キーワード：コメニウス, 西洋教育受容, 教育思想史, メタヒストリー, 竹山安太郎

はじめに

本稿は、『佛教大学教育学部論集』第31号（2020年3月）所収の拙稿「戦前期日本におけるコメニウス言説再考」、『佛教大学教育学部学会紀要』第19号（2020年3月）所収の拙稿「戦前期日本におけるコメニウス言説再考2」、『佛教大学教育学部論集』第32号（2021年3月）所収の拙稿「戦前期日本におけるコメニウス言説再考3」、『佛教大学教育学部論集』第33号（2022年3月）所収の拙稿「戦前期日本におけるコメニウス言説再考4」、『佛教大学教育学部論集』第34号（2023年3月）所収の拙稿「戦前期日本におけるコメニウス言説再考5」、『佛教大学教育学部学会紀要』第22号（2023年9月）所収の拙稿「戦前期日本におけるコメニウス言説再考

6」の続編である。

17世紀チェコの思想家ヨハネス・アモス・コメニウス (Johannes Amos Comenius, 1592-1670. チェコ語表記では、ヤン・アーモス・コメンスキー (Jan Ámos Komenský)) は、教育以外でも神学・哲学・自然学・歴史・文学・言語・政治等にわたって重要な事績を残している。しかし、欧米各国で国民教育制度が成立した19世紀、教員養成の教科書として書かれた教育史 (教育思想史) において近代的な教育の先駆者として記述され、コメニウスは日本ではもっぱら教育家としてあつかわれてきた。ここには、歴史が書かれるのにもともなう歴史的問題、いわばメタヒストリーの問題がある。本研究は、明治からおおよそ1945年までに発行された書籍や雑誌記事に現れたコメニウスに関する言説を現れた順に再構成し、調べがついた限りで概要等を付して若干の考察を加えるものである。井ノ口淳三氏 (追手門学院大学名誉教授) によって日本教育学会紀要『教育学研究』第44巻第3号 (1977年)、『追手門学院大学人間学部紀要』第8号 (1999年) 及び日本コメニウス研究会年報『日本のコメニウス』(第1号, 1991年~第20号, 2010年) に発表された目録に未収録の論考については「*」を付す。また、教育史 (教育思想史) の通史テキストのように、コメニウスを中心的にあつかったもののうちで紹介に値すると考えられるものは「番外」としてあつかう。(この段落は、理解の便宜のために、各連載に共通している)

2020年春からの新型コロナウイルスの感染拡大により、公共図書館や大学図書館の閉鎖や入館制限が続き、調査の進捗は思うにまかせない状態が続いていたが、2023年度に入り、各機関の訪問調査が再開できるようになった。本稿では、調査未了の地方教育会誌中に見出された論考を紹介したうえで、1931年から1934年までで確認できた論考をあつかう。

なお、読みやすさの便を考慮し、引用文の旧字体と旧かな遣いは基本的に現代表記とし、一部の漢字表記をかな表記に改め、括弧の省略や人名表記の統一をはかり、漢数字表記を算用数字表記に改めたほか、ルビを振ったり読点を補ったりした箇所があることをお断りする。西洋史や西洋教育史で比較的良好に知られた人物の原語表記や生没年は割愛した。引用者による補足は〔 〕で示した。本文中に書誌情報を記した文書は引用 (参考) 文献に改めて記さなかった。

補足1. 無名子, 「教授之葉」, 『対馬教育会雑誌』, 第1号, 1889年11月。番外

国立国会図書館デジタルコレクションの検索によって、『対馬教育雑誌』第1号所収の「教授之葉」(8~16ページ)の末尾に「コメニウス氏の生徒分類」が付されていたのを見出した。これは、『大教授学』第12章で、コメニウスが、人間の才能を、鋭いか鈍いか、従順か強情か、学習意欲があるかないかという3つの観点を組み合わせて6つに分類した下り(18~25節)の紹介である。拙稿「戦前期日本におけるコメニウス言説再考2」で紹介したように、『教育評論』(教育評論社, 第13号, 1889年9月)には「『コメニウス』氏の生徒分類」という記事があ

るが、これを転載したものと見なせる。

ゆえに、この記事は、単編ではなくオリジナルでもない。しかし、都府県よりも小規模の地域でも教育会雑誌が出版され、そのなかでコメニウスがとりあげられていた事実として興味深いため、ここにとりあげることとした。『教育評論』の記事が出てわずか2カ月後に転載されていることも、地方における西洋教育への関心を示すものだ。

本文では、「伶俐順良にして学問を好み最も学問に適する児童」, 「深く事物を洞察ししづかにこれを理會し性質従順なる児童」, 「深く事物を洞察し勉強怠らざるも頑固執拗なる児童」, 「従順にして勉強をなすといえども事理を會得する遅緩にして大いに了解に苦しむ児童」, 「愚鈍怠惰にしてかつ煩わしき児童」と書かれている。第6番目については、「此徒すらな吾人は宜しく最初より失望すべからざるなり、しかりといえども此徒にして到底改良することあたわずんば宜しく放任に附すべきなり」と結ばれている。たしかに、『大教授学』の本文には、「捻れて節瘤だらけの木材は見捨てるしかない」[コメニウス 2022: 107] と書かれているが、その前後に強情さが清められれば改善の余地がある、あるいはカトーやプルタルコスの言が引かれ、子どもの成長は大人たちの力次第であることが強調されている。

補足2. 寺内頼, 「教育家列傳 コメニース」, 『鹿児島県私立教育会雑誌』, 第99号, 第100号, 第105号, 第106号, 第109号, 1902年1月, 2月, 7月, 8月, 11月。*

これまで調査できなかった地方教育会雑誌に収録された論考である。この雑誌を大学図書館として唯一所蔵している筑波大学附属図書館では、101号, 107号が収録されていない。また、この雑誌は111号から『鹿児島教育』に改称されるが、1912年刊の230号以前のものも確認できていない。したがって、この連載が5回よりも長い連載であった可能性もある(105号の目次には「第百号続」とあるので、101号への掲載はなかったと考えられる)。

第99号所収分では、表題では「コメニース」と書かれているが、本文の生涯の概略では、この時期には珍しく、「ヨハン、アモス、コメンスキー」と紹介されている。出生地は、「ウンガクシンプロッドを距てること遠からざる一村落ニヴニッツ」とされている。ウヘルスキー・プロトのウヘルスキーは「ハンガリーの」を意味する形容詞であり、ドイツ語ではウンガリッシュ(ungarisch)となる。生没年がそれぞれ正しく1592年と1670年となっているのも、この時期には珍しい。生涯の簡単な説明のあと、『大教授学』の第1章から第33章の表題が紹介され、以後の連載では、「読者のために特に有益なるべしと信ずるもののみを述ぶべし」と結ばれている。

この論考の典拠がなにであったかが気になるところだが、ここでは、1896年に出版された『大教授学』のモーリス・キーティング(Maurice Walter Keatinge, 1868-1935)による最初の英訳(London: Adam and Charles Black, 1896)である可能性を指摘しておきたい。同訳書では、人名はJohn Amos Comeniusと表記され、ヨハンとはなっていないが、ボヘミア語では

Komenskyというと付記されている。また、出身地はUngarish Brod近くのニヴニッツとされ、生没年も正しく示されている。『大教授学』各章の表題の邦訳も、キーティングの英訳をもとにしたと判断できる。

さらに、拙稿「戦前期日本におけるコメニウス言説再考4」で紹介したように、三浦関造(1883-1960)の『教育文学十講』(隆文館図書, 1918年12月)では、三浦が『大教授学』をとりあげた際、鹿児島師範秘蔵の原本を借り出して参照したと書いており[相馬 2022: 17], この連載が書かれた当時、キーティングによる英訳『大教授学』は鹿児島で参照可能であったと思われる。

第100号所収分は、「コメニウスの学説 ◎人は教育に依りて作らる」と題され、『大教授学』第6章の抄訳が紹介されている。この章は10節からなるが、第2節と第5節以外の内容が、手際よく要約されている。第6節の教育を受けられなかった子ども例についての紹介は詳しい。

第105号所収分は、「コメニウス氏の教育学説(続) ◎人は幼時に於て最容易に造らるるものにして、又この時期以外には適当に造られざるものなり」と題され、『大教授学』第7章の概要が紹介されている。全9節のうち、宗教的なニュアンスの強い第2節、第3節を除いた各節の内容が要約されている。

第106号所収分は、「コメニウスの学説(続) ◎少年は共同的に教育せられざる可からず、これがために学校の必要あり」と題され、『大教授学』第8章がとりあげられている。ここでは、学校の起源を述べた第3節と学校を設けることの宗教的意義を述べた第4節を除いた部分が要約されている。

第109号所収分は、「コメニウスの学説 ◎教授の確乎たる順序は自然に則り毫末の妨碍なきものたらざる可からず」と題され、『大教授学』第14章がとりあげられている。第1節、第2節の要約に続いて、第3節から第6節のコメニウスに特徴的な比喻による説明は割愛され、再び第7節、第8節のキケロやヒポクラテスを引いた説明が要約されたのち、第9節から最後の第15節までがまとめられている。

全体として、コメニウスの主張の宗教的な色彩が薄められた紹介になっている。

著者の寺内頼は、国立国会図書館デジタルコレクションで検索しただけでも、明治30年代から昭和初期にかけて各地の師範学校の校長を務め、かなり多くの著作を物していることがわかった。単著は次の通りである。

・『幼児心意発達之理』(内田老鶴圃, 1895年2月) イギリス生まれでドイツで活動した心理学者のウィリアム・ブライヤー(William T. Preyer, 1841-1897) *Mental Development in the Child* を抄訳したもの。

・『理論的教育学』(村上書店, 1900年9月) ヘルバルト派教育学に則ったもの。

・『新令適用 学校管理法』(同文館, 1901年3月, 1907年にも再刊)

・『教育的心理学』(普及舎, 1901年4月) ウィリアム・ジェームズの『教師に対する心理学上

の説話』(Talks to Teachers on Psychology)を抄訳したもの。

- ・『普通心理学』(集英堂, 1901年5月) ヴィルヘルム・ヴントの心理学説を解説したもの。
- ・『道徳教授学』(村上書店, 1901年9月)
- ・『尋常小学直観教授指針』(集英堂, 1902年1月)
- ・『人類及動物心理学講義』(上下, 1902年2月) ヴントの著作の邦訳。
- ・『実際的教育学』(宝文館, 1902年6月)
- ・『訓育要義』(金港堂, 1907年4月) 道徳教育の理論的解説書。
- ・『思想善導方案』(金港堂, 1921年4月)
- ・『人格完成自覚自修』(米本書店, 1924年7月)
- ・『行の教育』(教育研究会, 1928年7月)

著作には、当時の教員養成政策にしたがったものが多く見られるが、しかし、ヘルバルト派はもちろんのこと、ジェームズやヴントといった心理学についての深い理解をうかがわせるものも複数ある。コメニウスについての連載を執筆していた当時の精力的な仕事ぶりもうかがわれる。



写真1. 寺内穎
『大日本現代教育家銘鑑』
第二輯より

また、国立国会図書館デジタルコレクションを検索した結果、千葉県友倶楽部の『千葉県友大会』(1920年)に寺内に関する最もまとまった情報があった(251~252ページ)。この他、官報記載の情報を補いつつ、経歴をまとめておく。寺内穎は、1869年(明治2年)6月、栃木県足利郡久野村(現在の栃木県足利市)に生まれた。1898年3月に東京高等師範学校文科を卒業し、ここでとりあげたコメニウスについての連載を執筆していた当時は、鹿児島県師範学校教諭を務めていた。その後、兵庫県御影師範学校教諭、和歌山県師範学校教諭兼主事、和歌山県立新宮中学校長、香川県立三豊中学校長、千葉県立安房中学校長、千葉県立長生中学校長、千葉県立大多喜中学校長を歴任した。新宮中学校長時代の1910年には同盟休校事件があり、首謀者と見なされた佐藤春夫

(1892-1964)を無期停学としたことで批判を浴びた[新宮市資料編さん委員会 1986: 793-797]。しかし、その5年後に出版された『大日本現代教育家銘鑑』第二輯で、寺内は肖像写真入りで、「人と為り重厚温雅にして、すこぶる同情心に富み、外寛にして内明かなり、心を披きて誠を示し、己を虚しうしてよく人を容れ、身を律すること秋霜の凜乎たるが如く、人を待つこと春風の霽然たるに似たり」[斎木織三郎 1915: 845]と紹介されている。最後は、栃木県女子師範学校の初代校長を務め、栃木県立宇都宮第二高等女学校長を併任していた1929年3

月に死去した [栃木県教育史編纂会 1958 : 410]。

番外 マサリツク大統領, 竹山安太郎訳, 『チェツクスロワキヤ国 建国と理想』, 日東出版社, 1931年9月。

本書は, チェコスロヴァキア第一共和国の大統領で哲学者・社会学者であるトマーシュ・ガリッグ・マサリク (Tomáš Garrigue Masaryk, 1850-1937) が著した *The making of a State; Memories and observations 1914-1918*, London : Allen & Unwin, 1927. の翻訳である。

第一次世界大戦の渦中, チェコとスロヴァキアによる国家樹立のために運動していたマサリクは, 1918年4月に下関に到着し, そののち東京の帝国ホテルに滞在した。この時期に警視庁外事課欧米係に勤務していた竹山安太郎 (1872-没年の調べつかず) は, マサリクとの接触を試み, 帝国ホテル2階36号室での会見が実現した [竹山 1931 : 8] ⁽¹⁾。この頃, チェコスロヴァキア軍団は, 現在のウクライナからシベリアに展開して苦境に立たされていたが, マサリクは日本政府の協力を望み, 竹山はその旨を外務省に取り次いだ。マサリクは, 4月10日にアメリカ合衆国のトーマス・ウッドロウ・ウィルソン (Thomas Woodrow Wilson, 1856-1924) 宛ての書簡をしたためている [マサリツク 1931 : 267]。同訳書の序からは, 竹山がマサリクの人格に心酔したことが読みとれる。

その後, 竹山は, 「ロシア革命の一端をも目撃したい」 [竹山 1931 : 15] との思いから, 陸軍省への移籍を申し出て, 1919年に敦賀港から台中丸で大陸に渡った。この船にはシベリアにいるチェコスロヴァキア軍団を慰問するためのチェコ国民議会の要員も乗船していた。竹山は, その従軍体験を『西比利亞事変と国際関係の真相』に記している⁽²⁾。

翌1920年, 当時ハルビンにあったチェコスロヴァキア軍団の司令部でマサリクの誕生祝いの式典があり, 竹山は, この時ハルビン特務機関長であった石坂善次郎 (1871-1949) の代理として参列したが, チェコスロヴァキアの将校の一人がマサリクと竹山の会見に居合わせており, そのため竹山は大変な歓待を受けた [同 : 16-17]。

シベリア勤務を終えた竹山は, 帰国後, 関東大震災に罹災し, 「復活を謀るために一私人となり, 自己の業務に没頭していた」 [竹山 1934 : 10] という。1930年3月, 在日チェコスロヴァキア公使館主催によるマサリクの80歳記念の音楽会が青山の日本青年館で開催される⁽³⁾ ことを知らされた竹山が公使館に連絡をとると, 公使館は1918年のマサリクと竹山の会見のエピソードを把握しており, 竹山は公使館での祝賀会に招かれた。祝賀会への出席にあたって, 竹山はマサリクとの会見のエピソードを詳細にまとめ, それは公使を通じてマサリク自身に伝えられ, 返礼としてマサリクの署名付きで贈られたのが *The making of a State; Memories and observations 1914-1918* であった。こうして竹山は, 同書の翻訳にとりくみ, 650ページに及ぶ天金函入り的美装本が出版されることになった。1933年暮れ, 竹山はチェコスロヴァキア政府から白獅子勲爵士勲章を贈られている [同 : 31]。翌年には, マサリクを支えその後を継いだ

エドヴァルド・ベネシュ (Edvard Beneš, 1884-1948) の著書を『大戦と建国奮闘秘録』(日東出版社, 1934年)として出版している。

さて、同書の巻頭には、マサリクの肖像写真に続いて、「人生は誠実と確信とに導かれるものでなければ虚偽であり、無価値である。我が建国の基礎は倫理すなわち道徳であって、包容力の大きな『コメニウス』の精神における道徳である。我が国の存在の意義は全世界が認むるものでなければならぬ。」とマサリクの言葉が記され、当時の駐日チェコスロヴァキア公使、代理公使の肖像、本書の編者でジャーナリスト、歴史家のヘンリー・スティード (Henry Wickham Steed, 1871-1956) の序が収められ、竹山の長い序が続いている。

スティードの序文は、長い本文をよく要約している。1648年のウェストファリア条約によって祖国への帰還と信教の自由への希望を閉ざされたコメニウスは『死に近く母なる兄弟教団の遺言』(*Kšaft umírající matky, Jednoty bratrské*, 1650) を著し、そのなかでいつの日かチェコ人による統治が回復すべきことを記したが、この言葉はチェコの民族再生運動において重要な意味をもつようになった。スティードは、下に示すように、チェコの民族再生運動におけるコメニウスの意義やマサリクにとってのコメニウスの意義が端的に示されている。なお、『遺言』は訳書中では『遺訓』とされている。

「大戦〔第一次世界大戦〕の開始さるるや彼〔マサリク〕の精神はその奥底までも動かされて、全身全力をこれに傾倒したが、彼の考えは左の如くであった。すなわち300年間奴隷であった後に彼の国民はフスとボヘミア同胞(兄弟)教会〔チェコ兄弟教団〕が考えた如くに、再び自由に生まれかわって、精神的民主的統一が得られしかして「怒りの嵐が去った時に汝ら自身のものに対する支配権は汝らに還るべしと余は神の前に信ず、オー、チェコの人々よ」と叫んだその師コメニウスの予言者たるのその夢を成就さする者はこの自分にほかならぬということであった。」[スティード 1931: 2-3]

「バラツキーはチェコの歴史の意義を説明してコメニウスの精神における教育によってのみ救済方策が見出されると教えた。」[スティード 1931: 7]

また、竹山の訳者序でも、マサリクの政治思想におけるコメニウスの意義が、端的にまとめられている。

「マサリク大統領は以上の如くにその国家建設の基礎を倫理、すなわち道徳に置いている。この道徳はヒュームにより、カントによりて共に研究唱導されたものである。この道徳は崇高で包容力の大きなコメニウスの精神における道徳である。」[竹山 1931: 28]

本文中では、第一次世界大戦が始まった1914年8月から同年12月までのマサリクの回想が「コメニウスの遺訓」と題されて収められている。マサリクは、国家樹立を企図する文字通り世界一周の旅のなかで、チェコ兄弟教団によるチェコ語訳の聖書(クラリツェ聖書)とコメニウスの『遺言』を携えていた。本書には次のような記述がある。

「オランダは比較的閑静であったので、静かに将来の事業を考究することができた。多少疑

惑も起こり、躊躇したところもあったが、コメニウスのことを考えたのでこの疑惑が消散した。オランダには彼の墓がある。これに詣でて彼の時代の政治におけるその宣伝の例、その政治的予言しかしてその遺訓に書き残されたプログラムが自分の心に蘇生した。今後起こった自分の世界周回旅行中、このコメニウスの遺訓とモラビア同胞教会のクラリツカ聖典とは自分が日々記憶すべき国民的ならびに政治的記念物であった。」[マサリク 1931: 10]

コメニウスの『遺言』は、オーストリア帝国との戦闘にあたっての決意が示される下りで引用されているように [同: 47]、民族主義的に解釈されることが多い。しかし、マサリクは、暴力的な手段を前面にすべきではなく、そうした手段によっても求める結果が得難いことも認識していた。彼が、あるべき方向性を歴史への参照から導き出そうとしたことはよく知られているが、同書にもその認識が端的に示されている。

「我々の文士でありかつ指導者であったコラルとパラツキーとは我がフス派の軍人ジシュカを我が模範とすべきか、教育家コメニウスを我が模範とすべきかの問題を決定するにあたって彼らはコメニウスをとった。」[同: 81]

マサリクは、民族の独立と戦争の是非という問題を、レフ・トルストイ (Lev Nikolayevich Tolstoy, 1828-1910) やロマン・ロラン (Romain Rolland, 1866-1944) を参照しつつ、考察している。また、「ゲーテかビスマルクかという難問は自分の個人的発達に強烈な影響を及ぼした」[同: 451] と記し、ドイツ思想といかに向き合うかという問題にも言及されている。そして、『チェコ問題』(Česká otázka, 1895) で考察されたドイツとチェコの思想的関係についての見解も以下のように示されている⁽⁴⁾。

「同胞教会の最後の監督コメニウスは教育と学校において彼の人道的思想を建設して教育と学校を手段として、彼の国民的及び汎人道的プログラムを遂行せんと努力した。彼は今日も依然としてライブニッツとヘルダーを介して、我々に語っている」[同: 623]

この他、チェコスロヴァキアという若い国家の教育問題、とくに国語教育についても、「もし我々が真にコメニウスの子孫であるならば、我が教授法を単純にし、かつ完全に、国語の学習をでき得る限り容易ならしめなければならぬ。」[同: 570] と記されている。

以上、かいつまんで紹介した限りでも、同訳書からは、マサリクの思想形成においてコメニウスが重要な位置を占めていることが伝わってくる。しかし、同訳書が教育界の関心を引くことはなかったようで、マサリクとの関連でコメニウスが論じられた記事や論文は、これまでの調査では見出されていない。

さて、訳者の竹山安太郎は、チェコスロヴァキア第一共和国と日本の交流史の一端にある人物であり、ここにあげた相当のボリュームの書物を3冊も物しているにもかかわらず、その事績はほとんど紹介されていない。チェコ研究者に照会したが、情報は得られなかった。また、竹山が在職していた警視庁にも照会したが、かなり過去のこととはいえ個人情報であるということで、情報は得られなかった。ただ、『大戦と建国奮闘秘録』の訳者序には、竹山自身

についての断片的な記述がある。

まず、幼少期は歴史好きで歴史家になることを勧められ、明治維新の激動に触れて世界を知りたいことを望んで英語、英文学を学んだとある [竹山 1934 : 1-2]。そして、1909年 (明治42年) には、「千葉県庁と県立中学校に勤務していた」 [同 : 2] とあり、当時の長官 (現在の知事) の有吉忠一 (1873-1947) のもとで地域の歴史研究の振興が奨励され、竹山も研究にとりくんだことが記されている。日露戦争後に千葉・北条の海岸にロシアの武官が避暑に訪れるようになったという記述 [同 : 4] は、竹山が在職した中学校が房総半島沿岸にあったことを想像させる。また、時期は記されていないが、「千葉県を辞して、神奈川県庁に転じ、有吉長官の下にその外事係として戦時の外事事務すなわち外交交渉、とくに対敵事務に従事していた」 [同 : 4] とあり、さらに、その後、「家庭上の不幸と大に健康を害し、静養を要すること」になり、「警視庁に出向を許された」 [同 : 6] とある。これをヒントに、千葉県文書館、神奈川県立公文書館、千葉県立安房高等学校に在職記録の有無を照会したが、手がかりは得られなかった。



写真2. 竹山安太郎
『神田区人物誌』より

しかし、国立国会図書館デジタルコレクションで「竹山安太郎」で検索すると、同姓同名の他人と考えられる人物2名を含め、195件のヒットがあった (2023年4月18日現在)。とくに、『国民自治総覧』 (東京毎夕新聞社、1927年、506ページ)、『神田区人物誌』 (1929年) には肖像写真を含めた詳細な情報、『法人個人職業別調査録』 (第6版、国際探偵社、1935年、8ページ) にも詳細な情報が記載されていた。また、千代田区立日比谷図書文化館に照会したところ、いくつかの有益な情報が得られた。以下、これらの情報に加え、官報、官庁の『職員録』その他の文献の情報を加え、竹山のプロフィールをまとめておく。

竹山安太郎は、1872年 (明治5年) 4月7日、千葉県長生郡西村 (現在の長南町) に生まれた。1889年に上京し、「当初軍人たらんと欲し、東京中学校前身、士官候補生養成所に入りたるも」 [神田ポスト社 1929 : 130]、健康を害して中退したとある⁽⁵⁾。その後、法律を学ぶとともに、実用英語教育に定評のあった国民英学会で英語を学んだ。第一高等学校教授で国民英学会でも教えていた英語学者の斎藤秀三郎 (1866-1929、音楽教育家で小澤征爾 (1935-) を育てたことで知られる斎藤秀雄 (1902-1974) の父) は正則英語学校を設立してそこに移ったが、竹山は斎藤にも学んだ。

1899年4月、千葉県属に任じられ、1914年まで知事官房の通訳、警察部に勤務する (『職員録』明治34年 (乙)、129ページ、『職員録』明治35年 (乙)、137ページ、『職員録』明治36年 (乙)、135ページ、『職員録』明治37年 (乙)、135ページ、『職員録』明治38年 (乙)、135ページ)

ジ、『職員録』明治39年(乙), 139ページ, 『職員録』明治40年(乙), 151ページ, 『職員録』明治41年(乙), 169ページ, 『職員録』明治42年(乙), 183ページ, 『職員録』明治43年(乙), 191ページ, 『職員録』明治44年(乙), 203ページ, 『職員録』明治45年(乙), 211ページ, 『職員録』大正2年(乙), 203ページ, 『職員録』大正3年(乙), 217ページ)。

1901年12月には師範学校, 中学校, 高等女学校英語科教員検定試験に合格している(官報第5537号, 403ページ)。これにより, 千葉県立成東中学校と千葉県立千葉中学校で嘱託教師も務めることになった(『職員録』明治41年(乙), 169ページ, 『職員録』明治43年(乙), 191ページ)。

なお, 1919年(大正8年)発行の『千葉県誌』(稿本 上)の第2編第2章「神社及び宗教」には, 千葉県内のキリスト教の状況が記されているが, 同盟教会派の千葉教会の項目には次のような記載がある。

「千葉町にては通訳竹山安太郎通訳の労を執り遂に信者となる。すでにして信者十余名となりしかば, かたわら英語学校を興せり。」[千葉県 1919: 666]

また, 『神田区人物誌』には, この頃に発生した千葉沖でのアメリカ汽船の座礁沈没事故の救難に携わったと書かれている。

1915年3月, 上京して外資系会社に勤務し, 翻訳課長となり, 翌1916年8月, 神奈川県通訳兼属に任ぜられ, 知事官房外事係主任となった。千葉県庁在職時に長官だった有吉忠一は, 朝鮮総督府総務部長官や宮崎県知事を務めたのち, 神奈川県知事となっていた。有吉の回想には, 第一次世界大戦時の対外交渉で竹山が活躍した様子が次のように記されている。

「対外交渉の際使った通訳が竹山安太郎という人であったが, この人は自分が千葉県に在任中, 千葉警察で通訳をしていた人で, 当時英語をしっかりと勉強するようにと勧めたりしたこともあったが, それが奇縁といおうか, 自分が神奈川に赴任すると, この人もまた偶然神奈川県に来ていたのである」[神奈川県企画調査部県史編集室 1974: 586]

1917年, 警視庁総監官房通訳となる(『職員録』大正7年, 667ページ, 『職員録』大正8年, 755ページ)。マサリクとの会見は, この翌年のことである。

1919年8月, 陸軍省の通訳官としてシベリアに派遣され, 野戦交通部, のちに軍司令部付としてハルビンやチタで勤務した。1920年, 大正三四年従軍記念章が授与されている(官報1922年4月22日)⁽⁶⁾。1922年12月に帰国し, 翌年3月に退官した。なお, 『神田区人物誌』には次のような記載がある。

「大正9年3月マサリク大統領となりし際, 氏は警視庁外事課長名義をもって渡欧し, 先年の好みをもって絶大の饗応にあずかりしことは, 人のほほ知るところなり。」[神田ポスト社 1929: 130]

この時期, 竹山はシベリアに勤務していたはずであり, チェコスロヴァキアを訪れることができたとは思われない。しかし, チェコスロヴァキア軍団の動向を追った長興進の研究によれば, この記述は単純には否定できない。1920年4月10日付『チェコスロヴァキア日刊新聞』

(652号, ハルビンで発行)に掲載された竹山の回想には, ヨーロッパ旅行を考え, マサリクとの再会を希望していると書かれている [長與 2023: 36]。同じく長與の研究によれば, チェコ共和国側の資料として, 竹山の名刺が2枚保存されているとのことだが, 1枚は帝国ホテルでの会見の際のものと考えられるが, もう1枚がいつマサリクに渡ったのかは検討の余地がある。名刺裏面の手書きのメッセージでは, マサリクは大統領と呼称され, 玉露が贈られている [同: 52-53]。長與が推測するように, シベリア滞在中の竹山がチェコスロヴァキアの関係者に託した可能性も考えられるが, 『神田区人物誌』に明記されていることからして, のちに渡欧した可能性も现阶段では否定できない。2枚目の名刺の住所も電話番号も, 下記の日東館のそれと合致する。

1923年の関東大震災の翌年, 竹山は, 東京市神田区錦3丁目に旅館「日東館」を開業した⁽⁷⁾。同館の所在地は, 正則英語学校のすぐ隣である。学生向けに食堂や文房具商も行っていた (『帝国信用録』, 21版, 帝国興信所, 1928年, 548ページ, 『帝国信用録』, 23版, 帝国興信所, 1930年, 228ページ, 『帝国信用録』, 24版, 帝国興信所, 1931年, 234ページ)。また, 錦町町会副会長などを務めつつ, 英語を教えることもしていた。なお, ここでとりあげている竹山が物した3つの書物の出版元の日東出版社は上記の日東館と同じ住所であり, 竹山は出版業にも関与していたと考えられる。

1934年12月, チェコスロヴァキア政府より勲章が授与される。『官報』(1934年12月29日)には, 「正七位 勲六等 竹山安太郎, チェックスロヴァキア国政府より贈与したる「シュヴァリエー, リオン, ブラン」勲章を受領し及び佩用するを允許せらる」(908ページ)とある。

その後の記録としては, 『官報』(1942年8月29日)の紀元2600年祝典記念章受與欄の東京府の授与者中に, 「正七勲六 竹山安太郎」とある。紀元2600年祝典は, 1940年(昭和15年)11月10日, 11日にわたって開催されたが, 記念章が授与されたのは11月10日の参列者のみだったという [古川 2020: 180-182]。このことから, 1940年11月までは存命であったと考えられる⁽⁸⁾。

田制佐重, 『教育的偉人と其事業』, 教育倫理講座4, 甲子社, 1932年7月。*

独立してあつかわれているのは, プラトン, クィンティリアヌス, ロヨラとイエズス会, コメニウス, ロック, スペンサー, ヘルバルト, ペスタロッチ, フレーベルの9名。分量で見るとスペンサー(41ページ)とペスタロッチ(30ページ)に紙面が割かれ, ロック, フレーベルが続き, コメニウスには21ページがあてられている。目次のフレーベルの紹介のみが細かいなど, 体裁が不自然である。

コメニウス自身の回想をとりいれた生涯の解説はバランスがとれており, すでに紹介した田制の著書『理想に生ける大教育家の生活』と同じデイヴィッドソンのコメニウス評価が引かれている [相馬 2022: 18-19]。ただし, 没年は1671年とされている。生涯の概説に続いて著作が

紹介されるが、ペイズの影響を受けて『開かれた言語の扉』（田制は『門』と訳）が著され、『前庭』（同じく『玄関』）と『広間』（同じく『大広間』）を出版し、未完に終わったものの『宮殿』が構想されたなど、教科書編纂のとりくみが詳述されたうえで、『世界図絵』（同じく『世界図説』）と『遊戯学校』（同じく『学校劇』）が紹介されている。『大教授学』の成立と受容についての説明も、「死後170, 80年間、全く認められずに、もしくは全く知られずに過ぎた」というのはやや誇張であろうが、『母親学校の指針』（同じく『母親学校の手引き』）についても言及されている。晩年までとりくまれた『開かれた事物の扉』（同じく『開かれた万物の門』）がスコラ哲学の伝統概念に浸潤された面がある一方で、百科的知識を集成した教科書の到達点であるとするなど、コメニウスにおける教科書の展開についての説明は、ほぼ妥当といえる。

梅根悟、「近世教育思想史に於ける自然概念及び合自然原理の発展」, 大日本学術協会, 『教育学術界』, モナス, 第67巻第3号, 1933年6月, 第67巻第5号, 1933年8月, 第67巻第6号, 1933年9月, 第68巻第1号, 1933年10月, 第68巻第2号, 1933年11月, 第68巻第3号, 1933年12月。

教育史家の梅根悟（1903-1980）は、東京文理科大学の卒業論文「近世教育思想史における自然概念及び合自然原理の発展（コメニウス、ルソー、ペスタロッチ）」（1933年）でコメニウスをとりあげたが、この論文はそれを収録したものである。『教育学術界』にはコメニウスに関する部分が収録され、ルソーに関する部分は、『教育学研究』（東京文理科大学教育学会編輯、寶文館、第5巻第1号、1936年1月、第5巻第2号、1936年、第5巻第3号、1936年、第5巻第4号、1936年）に収録されたが、ペスタロッチに関する部分は公刊されず、後年、『教育史学の探求』（講談社、1966年）に収録された（同書にペスタロッチに関する部分は未公刊と記載あり）。

この論考で注目されるのは、梅根がヨーゼフ・レーバー（Josef Reber, 1838-1924）やヤン・クヴァチャラ（Ján Radomil Kvačala, 1862-1934）らの海外の研究を引用する一方で、『大教授学』一辺倒ではなく、『自然学綱要』や『パンエゲルシア』といった自然史やコメニウスが構想したパンソフィアに関する著作の読解とそれに対する解釈が加えられていることである。コメニウスにおいて原罪説が弱められているという解釈は戦後日本の近代主義的な解釈につながるものだし、コメニウスが教授の原則を導くのにとった比喩的方法が批判を受け分析的方法をとるようになったという解釈も、今日からすれば議論のあるところだろう。しかし、コメニウスからライブニッツへのつながりが指摘されたり、ポーランドの宗教和解のために開催された1645年のトルン宗教会議にコメニウスが意見を具申したりといった事実にも顧慮が払われるなど、綿密な立論がなされている。梅根は、コメニウスには「18世紀の自然主義に見る如き衝動的生活の積極肯定」はなかったにせよ、「コメニウスとルソー・ペスタロッチとを客観的自然

主義と主観的自然主義の別として区別する常識的解釈」は「是正されなければならないであらう」と結論している。コメニウスのいう直観が感覚レベルの受動的な直観であるというペスタロッチ派の批判についても、コメニウスにおいて労作（活動）の原理が十分に考察されているとはいえないが、思考・発話・行動にわたる学習を重視していたことを指摘している。

兵藤三平、「コメニウスの生涯」(一)～(十),『渾沌』,第13巻第1,第3,第5,第6,第8,第9,第10,11号,12号,第14巻第1,第3号,1934年1月,3月,5月,6月,8月,9月,10月,11月,12月,1935年1月,3月。*



写真3. 兵藤三平
愛知県立豊田西高等学校提供

コメニウスの生涯についてのきわめて詳細な紹介である。月刊誌『渾沌』の1934年1月号から翌35年3月号までの間に11回にわたって掲載された。目次の項番にも本文の表題の項番にも重複やズレがある。1934年6月号は第4回目のところだが、目次では第5回になっている。1934年10月号と11月号の目次ではともに第7回の連載と表記され、本文の表題では10月号が第6回、11月号は第8回と表記されている。12月号では目次が第8回となっているのに合わせたのか、本文の表題も第8回となっている。

この連載と並行して、『渾沌』には、ペスタロッチの『白鳥の歌』の翻訳(辻幸三郎訳)やペスタロッチに関する論考、吉田松陰の教育思想研究、仏教經典の解説などが掲載されている。同誌は、松本義懿(1897-1976)が広島高等師範学校研究科に在籍していた1922年に出身地の石川で創刊した月刊誌で、「あたかもペスタロッチ研究誌の観があった」[徳育専攻科十三年史刊行会 1973: 41]という。松本は、1925年から27年まで石川県立小松高等女学校教諭を務め、1928年から東京市立浅草実務女学校教諭となった。『渾沌』の発行地は、当初は石川県だったが、1928年の第7巻第5号から東京に移っている。松本は小西重直、長田新、福島政雄らと『ペスタロッチ全集』の刊行や中江藤樹の思想の普及にもとりくみ、その縁で1936年に滋賀県立藤樹高等女学校(現滋賀県立高島高等学校)の初代校長となり、晩年は、藤樹書院に近い高島市安曇川町に暮らした[藤田 2006: 12-13]。

この連載の著者の兵藤三平(1910-1999)⁽⁹⁾は愛知県出身で、1933年に広島高等師範学校教育科を卒業後、同研究科に残り、1935年から広島文理大学に進んだ(哲学哲学史専攻)。1941年には、愛知県岡崎から『吉田松陰先生語録』を出版している。戦後は、愛知第二師範学校附属中学校(現愛知教育大学附属岡崎中学校)校長(初代, 1947~1949年)、岡崎市立竜海中学校校長(第2代, 1951~1955年)、愛知県立豊田西高等学校校長(第12代, 1963~1969年)等

を務めた。

いくつかの記録からは、兵藤が戦後教育改革に意欲的にとりくんだことがうかがわれる。愛知教育大学附属岡崎中学校創立40周年記念誌『育朋』には、1946年12月に記された「生活教育への宣言」が引用されている。

「我々の先輩が、生活教育ののろしを上げたのは、大正9年4月であった。そしてこの標識のもとに、過去2回にわたって新しい教育への道を指示したのである。第1回は、大正15年2月に「生活深化の真教育」を著にし、第2回は、昭和10年6月に「生活教育の実践」を刊行して、それぞれ世に問われたのである。従って生活教育こそは、我が校の尊い伝統であり、我々後輩に残された遺産である。我々の先輩は新しい教育への転期にあたって、ほんとうの教育を念じ続け、常に輝かしい道しるべとなることが出来たのである。

我々はこの輝く遺産を相続して、当面する新しい教育路のための一燈台としたい強い念願に燃えながら、敢えてここに3度「生活教育」を宣言せんとするものである。」[愛知教育大学附属岡崎中学校創立40周年記念事業実行委員会記念誌編集委員会 1987：27]

また、『西尾市史』現代(五)では、戦後教育改革をとりあげるなかで、1946年11月に八ツ面国民学校(当時の幡豆郡西尾町に所在)で開催された研究会に言及し、そこで講演した兵藤について、「新進の教育哲学者として当時の新教育のリーダーのひとり」[西尾市史編纂委員会 1980：247]と評している。

愛知第二師範学校附属中学校校長在職中に出版した『新教育の先駆者コメニウス』(交友社、1948年)は、第二次世界大戦後に日本で出版されたコメニウスに関する最初の単行本であると思われる。その「はしがき」には「旧稿に手を加えたもの」とあるが、それが『渾沌』誌上の連載にはかならない。「はしがき」にはまた、次のようにある。

「この頃新教育についてのいろいろな議論の際に、その先駆者として、J. A. コメニウスという名前や、その教育説が人々の口にのぼるようである。コメニウスという人物は、そんな人物であったのであろうか。どんな意味で、新教育の先駆者といわれるのであろうか。そんな事柄について、若い先生方や師範学校の生徒諸君に読んでいただけたらと思ってまとめてみたのがこの本である。」

ここには、コメニウスを新教育の源流と見なすという、アメリカのニコラス・バトラー(Nicholas Murray Butler, 1862-1947)や梅根悟によって戦前に示されていた理解[相馬 2018：136]が、デューイに過剰ともいえる関心が注がれた戦後教育改革の流れのなかでも生きていたことが示唆されている。同書は、藁半紙版80ページの小著で、用紙調達が困難だった当時の事情が反映しているかもしれないが、内容は『渾沌』での連載の表記を読みやすく改め、内容をかなり省略したものとなっている。下にこの連載と1948年の単行本との比較を示す。

「コメニウスの生涯」		『新教育の先駆者 コメニウス』主要目次	備考(後者での省略箇所)
巻号	主要目次		
13-1	はしがき	はしがき	前者では、参考文献を明示。後者では、新教育についての言及あり。
13-1	第一章 幼少時代 第一節 生ひ立ち 第二節 羅典学校の頃	第一章 幼少時代(1592-1610) 第一節 生ひ立ち 第二節 ラテン学校の頃	ほぼ同内容。
13-1	第二章 青年時代 第一節 大学生活 第二節 実際生活への序曲	第二章 青年の時代(1610-1621) 第一節 大学の生活 第二節 実際生活への序曲	ほぼ同内容。
13-1	第三章 放浪時代 第一節 受難 第二節 生涯の方向	第三章 放浪の時代(1621-1628) 第一節 受難 第二節 生涯の方向	予言者のコッターやポニアトフスカとの関わりは省略。
13-1 13-3, 5, 6 13-6 13-6, 8 13-8 13-8 13-8, 9 13-9	第四章 第一回リッサ滞在時代 第一節 大教授書の編輯 第二節 大教授書の内容 第三節 教科書編纂 第四節 語学入門 第五節 フィヂカ 第六節 語学入門手引書 第七節 百科全書主義と知 第八節 学校の改革	第四章 第一回リッサ滞在時代(1628-1641) 第一節 大教授書の完成 第二節 大教授書の内容 第三節 教科書の編纂 第四節 学校改革への声	『大教授学』の内容を詳説。後者では、一部の省略や項目の整理が見られる。前者二節四の「教授法」はカットされている。ラテン語学校のカリキュラムについても省略が多い。前者二節三から第七節はかなり省略され、レシュノ時代の自然学研究、『開かれた言語の扉の前庭』の執筆、パンソフィア研究への着手の経緯は大きく削られている。
13-9 13-9	第五章 ロンドン滞在時代 第一節 交友関係 第二節 不遇	第五章 ロンドン滞在時代(1641-1642) 第一節 交友 第二節 不遇	記述が簡潔にされているが、ほぼ同内容。
13-10 13-10, 11	第六章 スウェーデンの招聘 第一節 スウェーデンの要求 第二節 エルビング滞在与教科書の編輯	第六章 瑞典の招聘(1642-1647) 第一節 瑞典の要求 第二節 エルビング滞在	記述が簡潔にされている。二節がかなり削られている。
13-11, 12 13-12	第七章 第二回リッサ滞在時代 第一節 新語学教授法 第二節 心境の変化	第七章 第二回リッサ滞在時代(1647-1650)	『言語の最新の方法』の主要目次が省略されている。
13-12, 14-1 14-1 14-3 14-3 14-3 14-3	第八章 サロス・パタック滞在時代 第一節 学校改革 第二節 世界図絵 第三節 学校劇 第四節 作法 第五節 優良学校の諸規定 第六節 パタックを去る	第八章 サロス・パタック滞在時代(1650-1654) 第一節 学校の改革 第二節 世界図絵 第三節 パタックを去る	『パンソフィア学校の輪郭』に示されている学校改革の提案とそれが十分に受け入れられなかった経緯が省略されている。『遊戯学校』、『よく秩序づけられた学校の法』等の説明も省略されている。予言者ドラビークとの関わりも省略されている。

14-3	第九章 第三回リッサ滞在時代	第九章 第三回リッサ滞在時代(1654-1657)	ほぼ同内容。
14-3	第十章 アムステルダム滞在時代 第一節 ドユ・イエール家の保護	第十章 アムステルダム滞在時代(1657-1670) 第一節 ドユ・イエール家の保護	1, 2節の記述があわされて簡略化されている。『闇のなかの光』、『闇からの光』の出版やそれにとまなう宗教論争等については省略されている。
14-3	第二節 著述	第二節 晩年の孤独	
14-3	第三節 晩年の孤独		

この連載で主として参考にした書物としてあげられているのは次の6点である。

- ①R. R. Rusk: *The Doctrines of the Great Educators*.
- ②Monroe: *History of Education*.
- ③Cabberley: *History of Education*.
- ④Quick: *Essays on Educational Reformers*.
- ⑤S. S. Laurie: *J. A. Comenius*.
- ⑥M. W. Keatinge: *The Great Didactic of Comenius*.
- ⑦Anton Vrbka: *Leben und Schicksale des Johann Amos Comenius*.

①の著者ロバート・ロバートソン・ラスク (Robert Robertson Rusk, 1879-1972) はスコットランドの教育心理学者で、同地の教員養成に大きな役割を果たした。同書は、1918年初版 (London, Macmillan & Co. Ltd.) で、プラトン、クインティリアヌス、エリオット、ロヨラ、コメニウス、ミルトン、ロック、ルソー、ペスタロッチ、ヘルバルト、フレーベル、モンテッソーリがとりあげられている。1954年に同書の第2版が出ているが、その際にはデューイの章が新たに加えられ、全体にわたっても新たな研究成果が参照されており、良心的な著作といえる。コメニウスに関しても、初版以降に現れた教会史家のマシュー・スピнка (Matthew Spinka, 1890-1972) による伝記やイギリスの教育学者ジョージ・ヘンリー・ターンブル (George Henry Turnbull, 1899-1961) によるハートリブ文書の研究などまでが参照されている。兵藤が参照したのは初版である。

②についてだが、ポール・モンロー (Paul Monroe, 1869-1947) の著作には、1905年発行の *A Text-Book in the History of Education* と1907年発行の *Brief Course in the History of Education* があり、いずれを指しているかはわからない。

③はアメリカの教育史家・教育行政学者エルウッド・パターソン・カバリリー (Ellwood Patterson Cubberley, 1868-1941) が著した *Syllabus of Lectures on the History of Education with Selected Bibliographies and Suggested Readings*, New York: The Macmillan, 1902, *The History of Education: Educational Practice and Progress Considered as a Phase of the Development and Spread of Western Civilization*, Boston: Houghton Mifflin, 1920, *Readings in the History of Education*, Boston: Houghton Mifflin, 1920, *A Brief History of Education*, Boston: Houghton Mifflin, 1922のいずれかを指すだろう。

④はイギリスの教育者ロバート・ハバート・クイック (Robert Hebert Quick, 1831-1891)が1868年に出版し (London: Longmans Green and Co.), 1890年に改版された著作で、この一連の研究でも、多く参照されている文献である。

⑤は、スコットランドの教育家でエジンバラ大学の教育学教授を務めたサイモン・サマーヴィル・ローリー (Simon Somerville Laurie, 1829-1909) が著した *John Amos Comenius Bishop of the Moravians: His Life and Educational Works*, London: Kegan Paul. である。1881年初版で1898年までに6版が現れ、内容の加筆や図版の追加が行われた。19世紀中に英語で書かれたコメニウス関係の著作としては、もっとも詳細なものである。

⑥は、キーティングによるコメニウスの『大教授学』の最初の英訳である。出版当初は日本での入手は非常に困難だったが、何度も版を重ねたこともあり、この時期にはかなり参照可能になっていたと思われる。

⑦は、チェコの教育者で歴史家のアントニン・ヴルブカ (Antonín Vrbka, 1860-1939) によるコメニウスの伝記 *Leben und Schicksale des Johann Amos Comenius*, Znaim: Fournier & Haberler (Karl Bornemann), 1892. である。同書には、当時現れていたドイツ語によるコメニウス文献のリストが加えられており、17の図版も収められているなど、有用な作品といえる。

連載には、複数の参考文献を参照したせいか、多くの図版が引かれている。13巻1号にはポーランド・レシュノの郷土博物館が所蔵しているフェルディナンド・グレゴール (Ferdynand Gregor) によるコメニウスの肖像 (1835年制作)、13巻3号には口絵として『教授学著作全集』第1巻の扉絵、13巻11号には口絵として『世界図絵』の動物の鳴き声から発音を学ばせるページが引かれ、各連載の冒頭には、『世界図絵』第98章の「書齋」の挿絵が割り付けられている。『新教育の先駆者コメニウス』には図版がまったくないのと比べて、はるかに親しみやすい構成となっている。

番外 古賀益城編、『教育聖典と語録』, 東光書院, 1934年1月。

教育精神編, 教育本質編, 教育思潮編, 教育実際編, 教師自警編, 付録からなり、詔勅や政府の通達がかなりのウェイトを占めている。教師自警編のなかに世界十大教育家という項目があり、孔子、空海、コメニウス、貝原益軒、ロック、ペスタロッチ、ヘルバルト、フレーベル、吉田松陰、福澤諭吉があげられている。生涯の紹介は簡潔ながらバランスがとれている。「自然の直観、実物実科の尊重を主張し、実学主義を大成した」と位置づけられている。

古賀益城 (こが・ますき, 1887-1976) は、現在の福岡県久留米市に生まれ、浮羽郡教員養成所に学んで尋常小学校の訓導となり、そのち福岡師範学校に学び、小学校の校長となってその実績が目された。郷土史の研究にもとりくみ、大部の『朝倉風土記』を完成させた⁽¹⁰⁾。

加藤三郎, 「コメニウスの人生観・世界観とその教育理想」, 『教育思潮研究』, 第8巻第2輯,

目黒書店, 1934年5月。

この号は戦前の教育学を代表する東京帝国大学教授の吉田熊次(1874-1964)の還暦記念と銘打たれており、吉田の回顧に続いて、戦前から戦後にかけて活躍する教育学者が寄稿している。

この論考は、チェコスロヴァキア独立後に著されたこともあり、出身地の紹介ではその旨記されている。チェコ兄弟教団は「惟一教派」と訳され、没年は正しく1670年となっている。また、『必須の一事』や『地上の迷宮と心の楽園』といった宗教的著作も内容の紹介に紙数が割かれ、千年王国論に傾倒したことも指摘し、「この世界観たるや、文芸復興期のプラトン哲学の理念を有している上に、多くの点においてヤコブ・ペーメをもまた想わしめるようなものであった」と指摘している。パンソフィアの説明とその教育学への展開の説明は端的で要を得ている。また、ラートケやコメニウスの自然主義を客観的自然主義、ルソー、ペスタロッチ、フレーベルの自然主義を主観的自然主義と位置づけるという当時普及していた学説を再検討し、「彼の自然主義は…神秘的な目的論的自然主義にして、主観と客観、個性と全体性を分離せず、両者を併合した統一性の上に立った自然主義である」と結論している。これは、辻や梅根の見解とも共通する。

加藤三郎(1909-没年の調べつかず)は、東京帝国大学文学部教育学科、同大学院を経て、1934年、愛媛県女子師範学校、愛媛県師範学校教諭等を務め、1947年、静岡第一師範学校教授となり、1949年、新制の静岡大学教育学部の助教授を経て教授を務め⁽¹¹⁾、退職後は、静岡女子大学(現静岡県立大学)に移った。

加藤は、おもに価値論の観点からデューイやセオドア・ブラメルド(Theodore Brameld, 1904-1987)の教育学を研究した。静岡大学教育学部教育研究所の『文化と教育』第57号には、教師の本棚という項目でコメニウスについて書いているが、加藤のコメニウス研究が相当に専門的であったことをうかがわせるものである。冒頭には次のように書かれている。

「おもえば古い、20年以上も前の学生時分のことだった。教育学のある教授が、東西教育史にあらわれた著名な教育者の思想と伝記との叢書の編集を計画されたとき、私にコメニウスを担当しないかということであった。原稿料稼ぎが大きな魅力であったので、コメニウスの主著『大教授学』(Didactica Magna)の全訳と伝記とを2冊の本にするために、夢中になってとりかかった。ところが不幸にも出版元が破産したため、この計画は中絶されてしまったので、かなり部厚な原稿はついに本にはならなかった。しかも、この原稿は現在では影も形もない。戦時中、亡妻が焚付けの代りに、それを端からもやしてしまったからである。」[加藤 1954: 34]。

この記述は、コメニウスの『大教授学』が教育学の古典としていかに重視されていたかを示すものであろう。本連載であつかったように、辻幸三郎による抄訳は出ていたが、戦前にも全訳を出版する計画があつたわけである。次稿で触れる予定だが、その計画は加藤のものにとど

まらなかった。

この記事には、『大教授学』の出版が1633年となっているなど気になる記述もあるが、『地上の迷宮と心の楽園』や『必須の一事』も引用され、『大教授学』の紹介はその宗教的基盤にも配慮したバランスのとれたものである。パンソフィアの新プラトン主義的性格の指摘も的確である。さらに、『世界図絵』については次のように書かれている。

「彼の思想的根底はキリスト教的世界観であるといわなければならない。というのは、『世界図絵』における地球の説明がその一例であると考ええる。彼はこの場合、天動説をとっている。天は「動く」ということを、直観を通して子供に教えるためには静的絵では間に合わない。そこで彼は、大小2枚の円形の厚紙を中心でとめて（つまり同心円である）、外側の円が内側の小円のまわりをグルグル廻るようにしている。いうまでもなく、小円は地球であって山や海、舟の絵がかいてあり、大円の天には太陽と星がそれぞれ上下にかいてある。太陽が上に来たときは昼を意味し、大円が半回転して星が上に来たときは夜を意味する仕掛である。」[同：42]

この点については、井ノ口が世界各地に所蔵されている『世界図絵』を調査して論じている[井ノ口 2016：145-152]が、加藤の言及は日本でこのことに触れた最初のものとも考えられる。20年後でもコメニウスを実学主義者として位置づける主張への批判は変わっていない。

「一切の事物がなんらの究極目的をもたず、宇宙や人生にたいして少しの意義をも認めないような機械的自然主義とちがうのが、彼の自然主義である。それは神秘的な目的論的自然主義であると同時に、主観と客観、個性と全体性とを分離させず、両者を併合した統一性の上に立った自然主義である。このような立場からして、同時にまた彼を実学主義者（realist）として片づける、言葉の粗雑さを警戒しなければならないであろう。」[加藤 1954：43]

(続く)

〔注〕

- (1) 長興進は、外務省外交史料館所蔵の資料から、竹山が、1918年4月15日と16日の2回にわたって帝国ホテルに滞在していたマサリクを訪問したことを明らかにしている[長興 2023：51]。
- (2) 竹山の『西比利亞事変と国際関係の真相』は、シベリア出兵に関する初期の、それも当事者の著作である。シベリア出兵に関心を抱いた作家の高橋治（1929-2015）は、『朝日ジャーナル』誌上で1971年1月から1972年12月まで『派兵』を連載し、未完ながら『派兵：第一部 シベリア出兵』、『派兵：第二部 シベリアの虹』（朝日新聞社、1973年）が出版されている。同書では竹山の著作が引用されている。しかし、シベリア出兵の研究書である、原暉之による『シベリア出兵 革命と干渉 1917-1922』（筑摩書房、1989年）、国際政治学者の細谷千博（1920-2011）による『シベリア出兵の史的研究』（有斐閣、1955年、岩波現代文庫、2005年）、麻田雅文による『シベリア出兵 近代日本の忘れられた七年戦争』（中公新書、2016年）には、竹山とその著作についてまったく言及されていない。井竿富雄による『初期シベリア出兵の研究』（九州大学出版会、2003年）には若干の言及があり、同氏に照会したところ、長興進の最新の研究について教示を得ることができた。

- (3) 『東京朝日新聞』の1930年3月5日(水)付け朝刊3面には次のような記事がある。

「マ博士の誕生祝賀 日チ親善のため 来る7日に

チェコスロヴァキア共和国建国の恩人であり同国大統領トーマス・ジー・マサリック博士は来る7日を期して第80回の誕生を迎えるのでこれを機会に益々日、チ親善の実を挙ぐべく同公使館では種々考究中であつたが、5日午後6時から日本青年館で新響のマサリック大統領誕生祝賀演奏会を開催する外、7日には午後7時25分から駐日公使カレル・ハラ氏がAKから「日本とチェコスロヴァキア」題下で演説放送することになってをり、当日は麻生区霞町の同公使館で盛大なレセプションがあるはず」

当時の新交響楽団(現、NHK交響楽団)の演奏記録によれば、同日午後7時から第65回定期演奏会が行われ、デンマーク出身の指揮者、ピアニスト、音楽教師のチャーレス・ラウトロプ(Charles Lautrup, 1894-没年の調べつかず)の指揮により、ビゼーの「第三組曲ローマ」、シベリウスの交響詩「トゥオラネラの白鳥」、リヤードフの「魔の湖」、サン＝サーンスの「サムソンとデリラ」より「バックナール」が演奏された。

『東京朝日新聞』の記事に間違いがなければ、祝賀演奏会は定期演奏会に先立って行われたと考えられるが、その記録は現段階では見つけられなかった。

- (4) 『チェコ問題』については、拙著『コメニウスの旅——〈生ける印刷術〉の四世紀』で紹介した[相馬 2018: 93-96]。
- (5) この機関が何であるかは特定できなかった。
- (6) 氏名下に(九、一二、一四)とあるが、「勲等功級及従軍記章、韓国併合記念章、大礼記念章褫奪せられたる者」の冒頭に「氏名の下に在る数字は褫奪の年月なり」とある。
- (7) 『帝都復興記念写真帖』(中川順吉、帝都復興記念写真帖発行所、1930年)には、神田錦町3丁目10番地にあった東京工科大学(現、日本工業大学)の校舎の写真に日東館の電柱広告が映りこんでいる。国立国会図書館デジタルコレクションでは、写真中の文字の認識が可能になっているものもあり、歴史的な情報の検索における有用性を示すものであるといえる。
- (8) 竹山安太郎の遺稿等が見出されれば、チェコと日本の交流に関する未確認の情報が得られる可能性がある。彼の家族の名としては、妻・喜多子(1875年10月生まれ)、長女・富美(1899年5月生まれ)、二男・信道(1911年4月生まれ)、三男・忠雄(1916年10月生まれ)があがっている。竹山が日東出版社から発行した著作の発行人には信道の名があることから、二男が出版業を経営したと考えられる。戦後、神田を拠点とした同名の出版社があつたが、経営者は柴田賢次郎という人物で、直接の関連はないと考えられる。これとは別に、1959年から1962年まで、竹山が経営した旅館の日東館の住所である神田錦町3-15にイロ印刷社があり、その関係者として竹山信道の名が散見される。アマチュア天文家の関勉(1930-)は、1965年にイケヤ・セキ彗星を発見し、この彗星は白昼でも太陽に接近する姿が見えるほど明るくなったことで話題となった。翌年、『未知の星を求めて：イケヤ・セキ彗星』(関記念出版会)が出版されるが、巻末には発刊に関わったイロ印刷の竹山信道に対する関勉の謝辞が記されている。そこで、関勉氏のホームページを通じて照会したところ、お返事をいただくことができた。しかし、この記念出版の頃に同社が全焼したとのことで、それ以後の音信はないとのことであった。千代田図書館への照会でも、同社が印刷していた『歯科時報』の第20巻第7号(通刊405号、1966年7月号)に、同社が1966年5月31日に全焼したという記述があつたとのことである。
- (9) 愛知教育大学附属岡崎中学校教頭の村上智彦氏より下記の教示を得た。

1986年(昭和61年度)の同窓会誌に喜寿表彰者として記載があることから、同年に76歳(数え年で77歳)だとすると、1910年(明治43)年生まれと考えられる。1999年(平成11年度)の同窓会誌に物故会員として記載があつた(3月25日)。

- (10) 福岡県朝倉市ホームページ「ふるさと人物誌14」<https://www.city.asakura.lg.jp/www/contents/1297059687443/index.html> (2023年10月15日閲覧)。
- (11) 静岡大学の菅野文彦氏に加藤三郎の経歴について教示を求めたが、静岡大学が開示できる情報としては、昭和43(1968)年3月に静岡大学を退職して以降の記録はないとのことであった。しかし、国立国会図書館デジタルコレクションの検索によって、『文化と教育：教育の課題と動向』(帝国地方行政学会, 1973年)という著書があることがわかった。その奥付けでは、静岡女子大学教授となっている。千葉大学教育学部教授を務め、『人間復興の教育』(協同出版, 1969年)等の著書がある加藤三郎は、2歳年長の別人である。

〔引用(参考)文献〕

- 愛知教育大学附属岡崎中学校創立40周年記念事業実行委員会記念誌編集委員会 1987. 『育朋』, 愛知教育大学附属岡崎中学校。
- 井ノ口淳三 2001. 「コメニウス関係文献目録(2000年7月~2001年6月)」, 日本コメニウス研究会, 『日本のコメニウス』, 第11号。
- 井ノ口淳三 2016. 『コメニウス「世界図絵」の異版本』, 追手門学院大学出版会。
- 神奈川県企画調査部県史編集室 1974. 『神奈川県史』, 資料編 11(近代・現代 1), 神奈川県。
- 加藤三郎 1954. 「教師の本棚3 コメニウス」, 『文化と教育』, 第55号, 静岡大学教育学部教育研究所。
なお、背表紙には通巻57号, 第5巻第7号とある。
- 神田ポスト社 1929. 『神田区人物誌』, 神田ポスト社。
- コメニウス 2022. 『大教授学』, 太田光一訳, 東信堂。
- 斎木織三郎 1915. 『大日本現代教育家銘鑒』第二輯, 教育実成会。
- 新宮市資料編さん委員会 1986. 『新宮市史 資料編』, 下巻。
- スティード, ヘンリー 1931. 「序言」, マサリック大統領, 『チェックスロワキヤ国 建国と理想』, 竹山安太郎訳, 日東出版社。
- 相馬伸一 2018. 『コメニウスの旅——〈生ける印刷術〉の四世紀』, 九州大学出版会。
- 相馬伸一 2022. 「戦前期日本におけるコメニウス言説再考4」, 『佛教大学教育学部論集』, 第33号。
- 竹山安太郎 1931. 「訳者序」, マサリック大統領, 『チェックスロワキヤ国 建国と理想』, 竹山安太郎訳, 日東出版社。
- 竹山安太郎 1934. 「訳者序」, エドワード・ベネシュ, 『大戦と建国奮闘秘録』, 日東出版社。
- 千葉県 1919. 『千葉県誌』, 稿本 上, 多田屋書店。
- 徳育専攻科十三年史刊行会 1973. 『徳育専攻科十三年史』。
- 栃木県教育史編纂会 1958. 『栃木県教育史』第4巻, 栃木県連合教育会。
- 長與進 2023. 『チェコスロヴァキア軍団と日本 1918-1920』, 教育評論社。
- 西尾市史編纂委員会 1980. 『西尾市史』, 現代(五), 愛知県西尾市。
- 藤田弘之 2006. 「草の根に生きた近江の教師：松本義懿と藤樹教学伝道の生涯」, 『しがだい：滋賀大学広報誌』, 第24号。
- 古川隆久 2020. 『皇紀・万博・オリンピック』, 吉川弘文館。
- マサリック 1931. 『チェックスロワキヤ国 建国と理想』, 竹山安太郎訳, 日東出版社。

〔謝辞〕

本稿を成すにあたって、竹山安太郎に関して、千代田区立日比谷図書文化館の向迫彩子氏、

長與進早稲田大学名誉教授から教示を得た。東洋大学の山本一生氏からは、兵藤三平の論考が収められた『渾沌』についてお知らせいただき、兵藤の経歴についても教示をいただいた。愛知県立豊田西高等学校からは、兵藤の肖像写真の掲載をご許可いただき、愛知教育大学附属岡崎中学校教頭の村上智彦氏には、兵藤の生没年についてご教示いただいた。静岡大学教育学部の菅野文彦氏には、加藤三郎の経歴についてご教示いただいた。記してお礼申し上げます。

(そうま しんいち 教育学科)

2023年11月14日受理